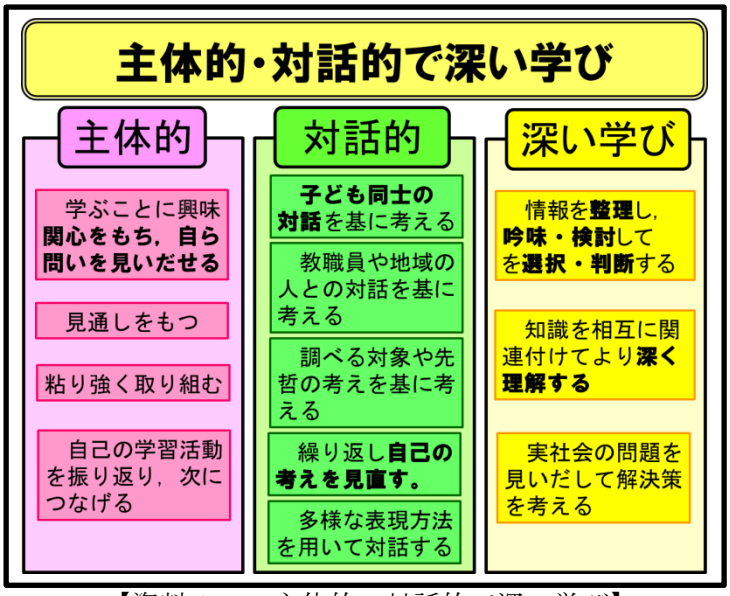
主体的・対話的で深い学びを通して，

思考力・判断力・表現力等を高める社会科教育の在り方（３年次）

１．目指す子どもの姿

本研究１・２年次の成果として，子どもが，調べる対象に興味をもったり，友達との話合い活動に積極的に取り組んだりすることができるようになった。しかしながら，その興味・関心が目指すべき資質・能力を十分身に付けるまで至らなかった。また，他者との対話を通して自己の考えを十分広げ深めることができていないことは否めない。

そこで，本年度は資料１のように「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を通して「自ら問いを見いだす」「子どもたち同士の対話を基に考える」「自己の考えを見直す」「情報を整理し，吟味・検討して選択・判断する」「深く理解する」ような子どもの姿を目指す。さらに，資料２のような社会科における思考力・判断力・表現力を身に付けた子どもの姿を目指す。



【資料１　　主体的・対話的で深い学び】

思考力	社会的事象の特色や意味などを多角的に考える力等
判断力	社会への関わり方を選択・判断する力等
表現力	考えたことや選択・判断したことを説明したり，議論したりする力等

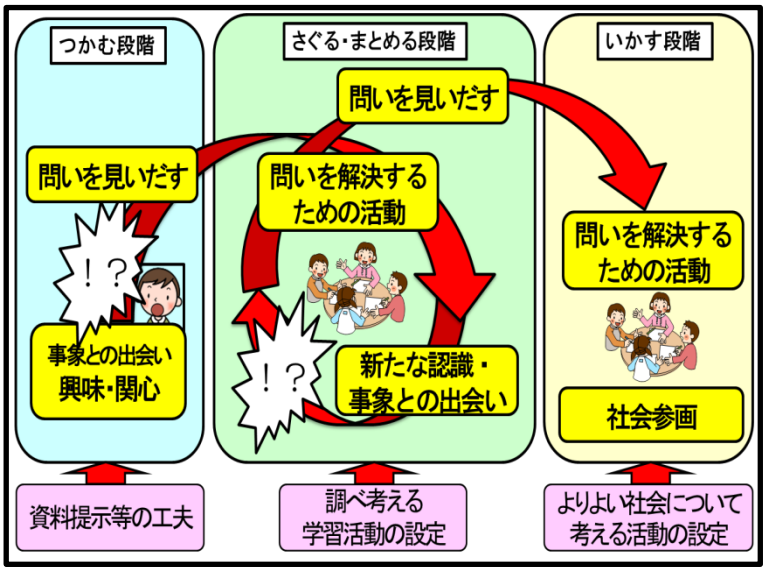
【資料２　　社会科における思考力・判断力・表現力等】

２．主題に迫る手立て

（１）自ら問いを見いだし，主体的に問題を解決する学習展開の設定

資料３のように「つかむ → さぐる・まとめる → いかす」の学習展開を設定する。

「つかむ段階」では，子ども自ら問いを見いだすことができるように資料提示等の工夫を行う。「さぐる・まとめる段階」では，問いを解決するための活動ができるように，調べ考える学習活動を設定する。「いかす段階」では，新たな問いを見いだし，よりよい社会の実現に向けて主体者意識をもって社会参画する展開を設定する。



【資料３　　自らの問いを見いだし，主体的に問題を解決する学習展開】

（２）対話を促す学習活動の工夫

これまでの研究では，子ども同士の対話が成立するようにするためには，「『何を』『どのように』話し合えばよいのか」検討してきた。その結果，以下の２つの工夫に効果があったので，継続して行う。

① 問いの焦点化の工夫

「問いの焦点化」とは，思考力・判断力・表現力等を高めるための深い学びに誘う手立てである。具体的には，一単位時間の中で，あるいは単元展開の中で，社会的事象の見方・考え方が働くように深い学びに向かう問いに絞り込むなど発問を工夫することである。

② 話合い活動の工夫

「話合い活動の工夫」とは，子どもが焦点化された問いに対して考えをもつことができるように，資料４のように，段階ごとに手立てを講じたりすることである。話合い活動を活性化するための具体的な手立てとして，次のようなものが考えられる。

段階	自分の考えをつくる段階	小グループや全体で考えを交流する段階	自己の考えを見直す段階
手立て	○資料提示の仕方の工夫 **○考えを可視化する表現活動の設定** **○声かけ計画表**を基にした声かけ	○思考ツール等やキーワードカードの使用 ○構造的な板書 ○根拠を問う問い返し ○グループ編成の工夫 **○声かけ計画表を基にした声かけ** ○見取りを基にした意図的指名	**○再度個人で書く活動の設定** **○自己の考えを見直すための時間の確保** **○声かけ計画表**を基にした声かけ

【資料４　　話合い活動の工夫の例】

本年度は，小グループや全体で考えたことを整理し，考えの吟味・検討を行い，もう一度自分の考えを再構成することで，考えを深めていくことができるようにする。また，考えを可視化させることや可視化した考えを基に一人一人に合わせた指導を行うことに重点を置く。

（３）評価を生かした指導の工夫

① 子どもの現状を見取る書く場の設定

子どもの思考・判断・表現の現状を見取ることができるように，文章表現や思考ツールに考えを書く場を設定する。また，話合いの前後で同じ表現物に書き加えたり，修正したりできるようにすることで，学習活動の中で教師が子どもの考えの変容を見取り，個に応じた指導ができるようにする。そのために，子どもが考えを表現する時間を十分に確保する。

② 声かけ計画表の作成

教師の見取りや評価した子どもの考えを指導に生かすことができるように，あらかじめ子どもの考えやつまずきを予想し，適切な声かけや支援を数パターン作成する。その際，「考えをもつため」や「考えを広げ深めるため」視点から声かけや支援を計画する。